

藤本 ありがとうございます。いろいろとわからないところ、質問したいところ等々あると思いますので、皆さんから質問等をいただきたいと思います。一つだけお願いしたいことは、今回のこの研究会は契約に関する研究プロジェクトということですので、もちろん発言内容はご自由ですけれども、できるだけ契約というものに引きつけたようなお話をしていただければ非常に幸いです。前回の研究会のときに、終わりのほうになってそういう話が出てしまって、録音に入らなかったということがありましたので、もしそういうことをお考えの方はできるだけ積極的にご発言いただければと思います。

ただ、そんなことを言うと縛りがきつくなってしまうかもしれませんが、ご自由にご発言願います。

内藤 質問です。最後のところで、社会的態度の多様性は遺伝的なバリエーションがあるのが適応的とおっしゃいましたけれども、それはだれにとって適応的という意味ですか。環境的に全部愛国心を強調しようとかしても、常に遺伝の影響が残っていて、それは適応的だという趣旨と聞いたのですが、それはだれにとって適応的ということですか。持っている個々の本人にとって（ですか）。

敷島 人間という種にとって適応的。

平石 それはまた例のあれになってしまうわけじゃないですか。

敷島 例のあれって何ですか。

平石 だから種の保存という話になるわけで、そうするとやはり論理的には通らないですよ。

内藤 そうすると、それが種にとって適応的だということはどういうメカニズムで残ってきたのかという疑問を感じるんですけども。

平石 つまり、あえてみんなと違う、例えばみんなが保守主義になっているところで、遺伝的にリベラルな人というのがいて、そのリベラルな人自身にとって適応度が高くなければ、そのリベラルな人は結局みんなから阻害されて社会から追放されて死んでしまったら子孫を残せないわけですから、そのリベラル遺伝子はなくなってしまうわけですよ。そこでそういう人もいることによって種が保存されるのであるというふうに言うと、どうしてということになってしまう。それはやはり論理的には基本的には成り立たないというか、すごく難しいということになっています。ここで話をするとそれはある意味マニアックなので控えていました。いやいや敷島さん、それはないでしょうという感じで。安藤先生はそれを言いたがる。安藤先生というのはこのプロジェクトのリーダーで、どうしてもここに戻ってくるんですけども、僕はちょっとそれは違うかなとは思っています。

内藤 前のところの話とも絡むと思うんですけども、そういう政治的態度とかその他アルトルーイズムとか何とかという態度を持つことが、その人のいる環境の中でどのぐらい損か得かという要素はありますよね。ある特定の人にとって適応的だったかどうか。それとの絡みで、今の話でその集団の中にいるこの人は遺伝的にリベラルだ、この人は遺伝的に保守的だということは、その人にとってそうであることがその集団の中において適応的

だということを説明するのかなと思って聞いていたのですが、そういうふうにはお考えではないんですね。

敷島 その人の遺伝子にとって適応的。

内藤 その人もしくはその先祖も含めてかもしれないですけども。その人の遺伝子にとってというか。別に特定の遺伝子を特定するわけではないけれども、そういう遺伝的資質を持ったことがその人にとってそこで適応的だった。全然契約ではなくてマニアックな話で、いきなり離れて申しわけないですけども（笑）。

敷島 もちろん保守主義だけが適応的であれば、もう保守主義遺伝子しか残らなくて、リベラル遺伝子というのは淘汰されていっているはずなので、リベラルも保守も両方とも適応的であったということは言えますよね。

内藤 リベラルも保守も両方適応的だった？

平石 ただ、今回の話に関していえばデータとして出てきたのは、最後に二つ結果が出てきて片方は交互作用の話で、あれは愛国心ですか。愛国心はちょっとよくわからないというのはあるんですけども、その前の民主主義的態度に関していえば、民主主義に直接かかわる遺伝要因はなくて、一般知能によって因果的に説明されるという話です。だから民主主義遺伝子は好民主主義遺伝子とか反民主主義遺伝子というものはない。個々人の一般知能が高い人は正ですよ。だから民主主義的な方向に行く傾向があるという。

敷島 それもどういうふうに解釈したらいいのかわからないんですけども、例えば知能が高ければ実際にディシジョンメイキングができたりディベートをしたり、そういった参加していくことに積極的になるのではないかと思います。ただ、逆方向の因果にもなっていないかもしれません。一般知能が低ければ反民主的に行くということも意味しますの。ただ、この場合の逆というのがいわゆる普通に言うような権威主義なのか、それとも協力しないという無関心なのかということは、この項目からはわかりません。

ただ、このあたりのことは非常に慎重に言わないと。簡単に言うと賢い人は民主主義、ばか権威主義というふうになってしまうので、非常に慎重になります。

藤本 前提として伺いたいんですけども、これも表現を誤ると非常に危ない発言になってしまうかもしれないんですが、知能の定義といってもいろいろあると思います。知能が高いことというのは一般的にその人が適応的なんでしょうか。それはそういうこととして理解していいですか。

平石 そこがまた非常に難しいところです。知能が高い、例えば一般的な知能というのは年収とかそういうものとそれなりに相関するわけですよ。ちゃんと僕はそこら辺を原典まで調べていないんですけども、そういうのはあるので、適応度と関係するような感じがするんですが、一方で知能というのは非常に遺伝の影響が強いわけです。もしも知能が本当に適応上非常に重要なものだったら、低いIQをもたらしような遺伝子は淘汰されてしまうので、みんなが頭がよくなっていなければおかしいわけです。ところが、そうではないということは、実はそんなに適応度には関係しないのではないかなという考え方もあり

ます。

だからさっきから敷島さんが言っている内的環境という話は、そこら辺のところでどうして一般知能の遺伝的な知能のバリエーションが残るのでしょうかねと。つまり、知能が低い人というのは本当に適応的なのか不適応的なのかということを考えたときに、知能が高い人は高い人なりのやり方があるけれども、低い人は低い人なりのやり方があるって、トータルで見ると結局、どっちも同じぐらいできているのではないかな。ぱっと見は確かに高いほうがよさそうだけれども、低い人も低い人なりのやり方があるのではないかなというのがアイデアです。そうするともしかすると高い人にとっては、民主主義的な態度をとることが自分のフィットネスを上げる上でいいけれども、低い人にとっては民主主義に対して無関心になるのか反民主主義になるのかわかりませんが、そういう戦略をとったほうが(いい)。例えば認知的なリソース、頭をそんなに使うことよりも日々のことをただ淡々とこなすことのほうが、彼らにとってはむしろやり方としてはよくて、それによって恋をして結婚をして子供を残すという、生物学的なところに限定した子供の数という意味でのフィットネスはきちんと維持できるということなのかなと。

彼らの生活が幸せかどうかという話と適応度とは全然関係なくて、子供が何人残るかというだけの話をしているので、適応度が高いのは別にいいことだという話ではなくて、子供が多いか少ないかだけの話ですけれども、子供はきちんと残して生活はしていけるというふうになっているのかもしれないと、このデータを見ると僕などはうっすらと感じます。そんなことを言ってしまうといいんだろうかという怖さもあります。(笑) 敷島さんのこのデータはこの研究会で政治とか法学の専門家の方から見たときに、率直に言ってどういう印象なのかというところをぜひ伺いたいというのが、敷島さんにはこんなデータがあるんだけど、と内藤さんにご紹介した理由でもあります。

藤本 私は特に法制史(法律の歴史)をやっているものですから、例えば仮に知能が高い状態というのは、学問レベルが一般的に高い状態だと持っていくならば、民主主義との相関性というのは歴史的に結構理解しやすい。ギリシア・ローマの時代、特にローマでも法学のレベルが高かった時代というのはまさに共和政期の末期ということで、ちょっと落ちかけたところではあるんですけども、民主主義と学問のレベルが高い時代というのは、いろいろな要因は歴史学的に説明されていますが中世で一たん落ち込んで、また中世の半ば以降に学問レベルが高まってくるに従って、封建制からだんだん絶対主義へ、さらに革命を経て民主主義へ、という形になっていく。すごく乱暴な見方をすれば、しかも知能というのを学問レベルと無理やり置きかえるならば、学問レベルが高いと民主主義の方向に行くということは、何となく説明ができないこともないのかなとは思いますが。

敷島 この矢印の間に例えば教育というようなことも考えてもいいのではないかと思います。まだやってみていないですけども。

藤本 今の話と関係していうと、先ほどのお話で、知能というのがどんどん拡大して高い方向に淘汰されていっているということではないというのは、歴史の話でいくとやはり

何回も落ち込みがあるわけです。学問のレベルが高くない状態というのはあって、必ずしも発展史的にずっと学問のレベルが高くなっていつているというわけではないということを考えると、その時代、時代に適応的なもののやり方、それを知能が高い・低いと言ってしまうのいかどうかわかりませんが、低い人たちが例えばマジョリティーを構成したときには、それなりのやり方ということで学問のレベルも落ちるし、それなりの別の例えば政治システムというのがとられる。また状況が変われば、いわゆる「知能が高い」人たちがマジョリティーを握って、民主主義的な形へと行くというような話として理解することは可能かと思うんですが、どうでしょうか。

内藤 学問も発展して、そういう教養レベルも上がって、民主主義が花開いたり、またそれがぐんと落ちたりとなっているときに、それぞれの人たちは歴史的に見てそれで得をしているんですか。国は発展し、国力も蓄え、国民も増え、みたいな。

藤本 それでも幸せということではないんでしょう。(笑)

内藤 必ずしも幸せかどうかはわからない。

藤本 そういうことではないんですよ。

内藤 だから落ち込んでしまって、あるところはそういうのが発達して民主的になり、でも歴史の流れからいつてぐんと落ち込んでそうではなくて、ものすごく権威主義的で、ある意味野蛮で、というかたちになったら、それはそれでものすごく発展してみんなすごく得をしているとか、歴史の流れを見たらそういうふうになるんですか。

藤本 恐らく歴史的な視点からすると、今から見ればすごく野蛮で、伝統＝古いものこそよいものだというような感じ方をしていて、何をやっているんだよと思うような時代でも、やはりその時代、時代においてはそれが歴史的にはそれこそ適応していた。その時代性には応じていたのではないかと理解するのが、現在の歴史的な見方の根幹にはあると思います。だから得をしていたのかと言われると難しいですが、決して損はしていなかったというか、それ以外のあり方が考えられなかったと言ったほうが正しいのかもしれないです。

どうでしょう、宇野さん。

宇野 日本の場合だと、民主主義的なさまざまな要因を民主主義の発生から考えて、ある程度理屈とか論理的なところからまず理解しているというのがあるのかなとちょっと思いました。民主主義発祥の地の人々が民主主義をどう理解し、どう受容して、あるいは拒否しているかということとちょっと違うのかなと。そういう意味で、あそこにある論理的推論能力とか言語能力とか空間能力とかをある程度駆使しないと、民主主義というものをとらえ切れない要因も歴史的な意味ではあるのかなと思いました。感想としてはそんな感じですよ。

平石 例えば発祥というとフランスとかになる。歴史的なというのもありますけれども、少なくとも西欧における子供たちが民主主義を理解していくときのやり方というのは違うんですかね。もっと空気のように民主主義なんですか。

宇野 そうだと思います。

内藤 あるいはもっと野蛮なイメージなのかもしれないですね。それはちょっと言い過ぎかもしれないですけども、もっと体で……

平石 『リヴァイアサン』みたいな。

内藤 そうそう。ひょっとして体でつかみ取るみたいなものとして戦ってかち取るみたいな。

宇野 例えば民主主義だけでなく、個人主義とか言いますよね。私はよくわかりませんが、イギリスなどでは、それこそ家庭内での人間関係とかそういうところからでもやっばり違うのかなと考えたら、それぞれの社会における一つ一つの事柄の歴史的な意味づけというのは違うのではないかと思います。素朴な疑問で恐縮ですが。

アメリカはリベラリズムとコンサバが非常に明確に出ているというのは、アメリカ国家の成り立ちから考えると、アメリカ国家の特質としてアメリカの国民という自負はみんなあると思うので、アイデンティティーの問題とかそういうことも関連してくるのかなと、素人ながらそういう感想を持ちました。

例えば中国とかでやったらどうなるか。

周 宇野さんの発言と直接に関係がないんですけども、さっき内藤さんと藤本さんの話を聞いて今、一つの例を思い出したんですが、例えば中華人民共和国が建国してから文化大革命という、一時期、民主主義とすごくかけ離れた状況がありまして、その時期には逆に中国の人口は4億から10億にも増えてしまいました。そのときの状況を考えれば、もし藤本さんのような考え方で一般知能を学問レベルに当てはめて考えれば最悪の状況、一般知能が底についたような感じで大混乱でしたので……。

内藤 文化大革命のときが。

周 はい。昔の残った文化遺産も全部壊して、しかも新しいものを何もつくってなくて、学生たちは勉強せずにいろんな別の労働とかをさせられるわけですから、大学も正常に機能していません。一般知能はもう最低のレベルになっているんですが、でも逆にこういう話があります。つまり毛沢東という方がいて、最初はある人口学者は中国の今の能力ではそんなに人口が多くなるとちょっと困りますと提言したら、人口が増えたほうがいいという彼らしい発言をしまして、結局、彼1人の判断で人口政策を放任したかたちになりました。それで人口は2倍以上にもなったわけですから、そういうことを考えれば、その状況の中で適応性はすごく高かったことになります。だから適応性というのは一体どういう価値があるのだろうか、と私は素朴に思っています。

藤本 人口がふえた、個体数がふえるということは、生物学的な意味からもすごく適応が高いという気がする。

平石 それは適応力が高いんですよね。

周 でも高過ぎると困ります。(笑)

内藤 ドイツはどうなんですか。ドイツはよく民族精神とかドイツの伝統とか言うでし

よう。法の根拠が何とかとかいうときに、そこへ求められるとか、そういう思想潮流がすごく強いですよね。そうしたらドイツの人とかだったら、この間も基本的にみんな保守的な傾向があるという話がありましたが、愛国心とか伝統とかというものに関するイメージとか受け取り方はちょっと違うんですか。

藤本 日本との違いですか？ どう一般化していいのかわからないですけど、例えば現在のドイツ人にとってという話と、100 年前とかの話になると違ってくると思うんですね。それこそ 20 世紀初頭のころというのは、愛国心というのがものすごく強かった。というのは、統一が遅くてドイツがドイツとして国になるのが遅かったので、だからほかの国では国民国家体制がちゃんとでき上がって、ナショナリズムみたいなものは内的なところから出てきていた。ドイツは逆にそれを使って統一しようとして持っていたところもあるので、自然発生的なナショナリズムや愛国心とはちょっと違うものが広まって、あげくの果てにあの 2 回の戦争ということになっていると思います。

では今のドイツ人が持っている愛国心は伝統的なものとかに由来しないのかというと、そういうわけでもない。国民国家の形成がなくとも、民族共同体に対する愛国心というか、帰属意識は強くもっている。中身自体が変化しているというべきでしょうか。やっぱりヨーロッパはさっきの宇野さんの表現をかりると、民主主義の本場だったわけですが、その中でも揺れ動きというのはあります。

当然、明らかにイギリスのものとドイツのものとは絶対違うと思います。それで思いついたのですが、敷島さんの挙げられた事例ではアメリカとかオーストラリアの話が多かったですが、ヨーロッパではあまりこういう研究はやらないんですか。

敷島 イギリスは盛んですが、ドイツはやっぱり……

藤本 大陸だからですかね。

敷島 昔の優生学のイメージがあるのかわかりませんが、ドイツはあまり進んでいないですね。

藤本 遺伝学的なこういう研究というのは。

敷島 それに関してはタブー視されている傾向がより強いようです。

平石 イギリスと北欧ですかね。フランスも。

敷島 一番進んでいるのは北欧で、北欧は国民総背番号というか、双子の情報を全部国が入手しています。先ほど申しましたけれども、私たちはどんなにいい研究をしても双子の情報など、国が全然管理しませんので住民台帳を自分たちで写すしか手がないわけです。すごくコストがかかるのですが、北欧は全部国が双子のデータを持っていて、その研究の意義が認められれば、それがすべて入ってきますので、あんなに人口が少なくてもものすごいサンプル数があるという点で、北欧が非常に進んでいます。

藤本 今日お話しになった話は全部、アメリカでの 3 本の発表と敷島さんご自身がやられた日本の研究だったわけですけども、例えばヨーロッパ、特に北欧なんていうのはそれこそ民主主義とか社会福祉とかものすごく特質のある、我々から見ると特殊な社会で

すよね。彼らはどう思っているかわかりませんが。そういうところではどういう結論が出るのかなというのは個人的に非常に興味があるところです。

例えばこの話をし始めるとまた概念主義だみたいなことになるわけですが、民主主義と知能との関連性とか遺伝との相関性をお話しするときに、やはり民主主義とは何なのかと。とらえ方の問題ですけども、宇野さんからはやはり日本には日本の民主主義の論理的に形成された側面を考えなければいけないのではないかなというような話があったわけですが、それは例えば北欧ではどうなのか、アメリカではどうなのかというところは考えていかなければいけないのかなという気はします。

森村 さっき共有環境と非共有環境というのを区別されましたけれども、共有環境というのは具体的に言うと家庭の環境ですか。

敷島 家庭でも、例えば子供が2人いて親が違いうように接すればそれはもう共有にはならないわけですけども、同じ家に住む者が同じように効果を受ける環境ということです。

森村 ご発表を聞くと、普通考えられているより共有環境の影響というのはあまりないみたいな感じがしたんですが。

敷島 そうなんです。それが行動遺伝学の発見の一つの大きなことで、共有環境の影響というのは本当に小さい子供さんにはあるんですね。知能なんかでも小学生ぐらいまでは家庭の共有環境の影響、すなわち一卵性だろうと二卵性だろうと同じ家に住めばそのレベルというのが似ているんですが、急に中学生ぐらいから家の影響というのは全くなくなってしまう。

実は私がやっているのは本当はそっちのほうで、今日は時間がなくそこまではご報告できませんでした。でも、共有環境の影響は、まったく、どこにもないのではなくて、家族の凝集性などが高いと共有環境はこんなふうにふえるよというような結果も出ています。今、平均値のところで見るとゼロですが、家族が結集して仲がいいと共有環境の影響はこんなにふえるとか、あとは母親とのボンディング、母親から愛されたというところの普通の家だったら、共有環境の効果はゼロですが、アタッチメントが強いとガアアとふえるとか、信頼なんかでもそうですけれども、そういうこともあるので、みんな平均値のところで語りますよね。ちょうど平均値のところは共有環境がいつもゼロなんです。だからといって、ないと言えないというのが私の主張です。確かに平均値で見れば本当にはないんです。でもそれはすべての家庭を全部一直線に並べてみると、何か主効果として挙げられるものはないけれども、よく見てみれば、例えばこの子にはこういう影響を与えようと一生懸命教育を施しているうちというのは、ちゃんとやっぱあるよということです。

あるいは逆にそれがまた低くても、これまたおもしろいんですけども、心理学的理論からいうとアタッチメントが形成されていないと、今度は子供が何とか母親にすがりつこうとするわけです。そうすると母親の態度を一生懸命まねて類似していきます。自分の態度を形成していくときにアタッチメントが形成できていれば、子供は今度はもう家の環境なんかどうでもよくなります。自分の遺伝的性向とか、あとは自分の友達とかそういった

ものを取り込んで、自己を形成していくのですが、アタッチメントが高くても、また低過ぎても今度は親にすぎるといえるのか、これはわかりませんが、やはり子供というのは家庭の環境の影響を自分の態度形成に取り入れていく。けれども、普通のうちではないということです。

藤本 それはそれで示唆的でおもしろい。

平石 それはそれですごく示唆的でおもしろいですね。

敷島 今日は本当はここまで言いたかったのですが、今日は遺伝の話を（しました）。

加賀見 今日初めてお邪魔させていただきました東洋大学の加賀見と申します。専門は経済学ですし、少しおくれてきましたし、過去の議論の経緯を全然知らないのとんちんかなことを言ったら大変申しわけないんですけども、よろしくお願いします。

今日の発表は大変おもしろかったんですが、お伺いしたいことがあります、今日の発表は基本的には態度についての研究ですね。民主主義が好きかどうかであって、民主主義が好きかどうかで態度がその時代とか社会とかの制度・体制をつくり出すというのは、絶対間に何かあるはずですよ。ただ民主主義が好き、だからこそ逆に言うと破綻する社会もあるかもしれないし、逆に助け合う社会もあるかもしれない。ここは態度の話をしていきますので、社会としての態度と政治制度・体制と分けて考えるべきだと思うんですけども、その議論をこれまでの議論の経緯も含めてどういう形で整理なさっているのかが一つです。

もう一つ、経済学でも進化的経済学というのがありますが、ミューテーション（突然変異）のほうは割と外成的に与えてしまって、それ以上は考えないというのが割と多かったんですが、ここでの話は種の中でその個人といえるのか、ある特定の要素、形質というものが淘汰されにくいのが適応性ということが多いんですが、種そのものがほかの種と競争するときに、その種全体としての適応性をもたらすために何か変異を外成的に与えるのかなと。なぜかわからないけれどもそうなのかなと思ったのですが、種の中での淘汰されにくいメカニズムと種同士の競争の中でのその種自体が淘汰されにくいメカニズムというものは場合によっては相反することがあると思うんですけど、そういうものの調整の議論というのはあるのかなというのがもう一点です。

その二つぐらいが非常に興味深いんですけども、いかがでしょうか。

敷島 2点目については平石先生。

平石 では2点目の話だけを先にしてしまうと、つまりそれが種の保存という話になるんですけども、種を守るために変異を外成的に与えるようなシステムというのはちょっと考えにくいですね。少なくとも生物の世界においてそういうものが生じるかどうかというのはわからないです。ただ、例えば進化経済学などでやるのはどっちかというと制度の進化という話だと思うんですけども、社会システムにおいてとか国家においてそういうことが生じることはあるのかもしれないと思います。種レベルでいえば、各個体にとって大事なのは自分の種が残るかどうかなのではなくて、自分が子孫を残せるかどうかということ

なので、そういう意味でいえば、他個体が同じ種であろうと他の種であろうとライバルであることに変わりはないんですね。けれどもたまたま他個体と協力する、ギブ・アンド・テークの協力関係を結ぶということもあるわけですが、そのときの相手というのは必ずしも同種である必要はないわけです。同種と結ぶことが人間の場合には非常に多いですが、共生関係といってそれこそ口の中を掃除するような魚がいますけれども、ああいうふうに他種間でお互いにヘルピングするということもあります。基本的には他個体というのは同種だろうと他種だろうと、自分のフィットネスを上げるときの敵であるというのが原則です。

加賀見 つまり種としての適応度みたいなものを目的として設定して、それで説明力が上がるとかは普通はあり得ない。

平石 それはちょっとあり得ないですね。大体種のためのことを考えるというのは、要するに自分以外の自分のライバルになるような周りの他個体のフィットネスを上げましょうという話ですよ。でも、そのために自分の子供が残らなくなったら、自分の遺伝子は残らないわけですから、それは自然淘汰になってセレクトアウトされてしまうわけです。

一番簡単な例を挙げれば、それこそ太平洋戦争でお国のためにと行って特攻してしまった家庭の子供は父親のいない子供になってしまうわけです。それとそんなことはしないで、おれは嫌だと言って家に残っていた父親がいる子供がいるとすると、戦後においてどっちのほうの子供に対するリソースが多くなるかということ、それはお国のことなんて考えないでやった家の子のほうがいいわけです。そういう話です。

国のためにと働くのは、そういう意味でも僕は愚かしいと思うんですけれども。ですから、それはちょっとあり得ない。ただ、国家レベルでいえば、もっとショートスパンで話が動いていくので、それこそ特攻隊が形成されることもあるでしょう。ある意味それは教育とかによる操作というものが入って、人間にはもともと他個体と協力しようという、また別の経緯で進化してきた傾向があるので、それをうまく操作する連中があらわれて、おまえがやることによって未来においておまえが報われるとかそういうことを言う。特定の宗教などもそういうことをやりますけれども、そういう形で操作してやらせることはあるでしょうが、進化というのはもっと長いスパンで行くので、そういうめちゃくちゃなことは全部どんどん排除されていってしまって、結局ピュアに残るのは自分のことだけになるでしょうということです。

2 番目のほうの答えとしてはそれです。

加賀見 もう一つ追加でご質問させていただきます。進化経済学というのは基本的にモデルの中でしか分析できないので、実験というのはなかなか難しい。そうすると相当理論的なお話になってしまいますが、変異というのは外成的にポンと与えてしまってそこでまってしまうのがほとんどすべてだと思うんですけれど、それはもうどうしようもないと考えるしかないんですか。

平石 基本的にいわゆる生物学におけるナチュラセレクションにおいても、変異とい

うのは外成的なものだと思います。そういうふうに扱っていると思います。

加賀見 そういうものは内成ができないもの。わかりました。2番目のはそれでもう完全にオーケーです。ありがとうございます。

敷島 1番目のほうですけれども、おっしゃるとおりもちろん社会的態度は行動を予測するものという前提ですので、必ずしもそれが100%行動として表出するかどうかということとはわかりません。しかし、一応心理学では態度あるいはパーソナリティというのは行動を予測するものであるという前提のもとで、ここでは具体的にはそれが投票行動ということになっていくと思います。でも最初に申し上げましたように、投票行動とコンサバティブかリベラリズムかという態度との相関は0.8とかというあたりですので、もちろんぴったりは一致はしていないわけですが、かなり予測力は高いということが前提として、そういった行動から制度へという流れで考えます。おっしゃるとおりで、態度を持つことが必ずしも制度を意味することにはならないのは明らかです。

加賀見 経済学だと態度とか思考能力、判断能力は与えられたものとして、ではそのとおりの社会ができて上がるのでしょうかというのが割とよく出てくるテーマです。そうすると民主主義は好きだ、でもむしろ独裁社会になってしまうということもモデルではつくり出せますので、そこは何なのか。逆に言うとその前のところはあまり気にしていなかったのが経済学なんですけれども。その点を含めて非常におもしろいなと思って。

敷島 私もそちらはおもしろいです。民主主義の態度があっても独裁主義というモデルもできるわけですね。ありがとうございます。ちょっと考えてみます。

平石 確かに心理学者は態度とかまで見ると結構満足してしまうところがあって、そこから先はもう任せたいみたいな気になっているところがあって（笑）、自分たちの仕事はそこまでだからみたいなのところがあるんです。

敷島 必ず個人の要因から説明して、そこで見つければその後はもう知らんという態度はよくないですね。

平石 でも確かにそうですよね。それはおもしろい。あとミューテーションが外成的にという話ですけれども、多分実際に生じているかどうかは別として、論理的に考えればほかの遺伝子に変異を生じさせるようなことをしでかす遺伝子というものが存在する可能性はあると思います。でも、その遺伝子がどうして生じたのかというと、それはランダムなノイズの結果として出てきたのでしょうかということです。

あと無理やり契約の話に結びつけていくと、例えばアメリカは契約社会とよく言われると聞くんですけれども、契約社会というのと民主主義的な社会というのはどう関係しているのかというのはあって、僕のイメージでは民主主義と契約的な社会というのはある意味結構結びついているのかなと。その共通点は契約というのは頭を使うものであるというイメージがあるので、特に人間がやるような契約、つまり（魚に）口の中を掃除してもらうというものもある意味契約ですけれども、あれはあそこでしか使えない契約ですが、人間というのはもっといろいろな恣意的な内容とか多種多様なものを交換する契約を結ぶことが

できて、逆に言えば人間はそういうことをするからこそ、これだけ脳が巨大に進化したという話もあるわけです。そういう意味でいくと、契約と民主主義が結びついてその民主主義を好むかどうかというところに、一般知能というものが因果的に関係しているというのは、社会的な望ましさとかは別として理論だけの話をすれば、きれいなまとまりだと僕には見えてしまうところがあります。

内藤 その根底にあるのは、個人が利益を自覚しているということだと思うんですね。契約があつて民主主義があつて、要するに社会契約で成り立つような社会はその本人が自分の利益を自覚しているから契約をすると得なわけですよ。本人が自分の利益を自覚していなくて、人任せにしたほうが自分の利益になるんだったら、契約的だったり民主主義的だったりする必要はないですよ。そこが分かれ目なのではないかと思っていて、一般的知識から民主主義への矢印が向くというのは、一般的知識を普通に持って自分の利益を個人として自覚したほうが自分にとって得だということとかかわっているような気がしています。もっと封建領主とか王様とか家父長とかに埋没して、その中にいて何も考えていなくて、言われるままバアーンとやっていたらそのほうが自分は得だったというのだったら、多分態度が変わってくると思うので、そこがポイントのような気がします。

平石 それこそ独裁者がいて、大学なんか通っていないで農村に行つて畑を耕せと言われたときに、頭を使っていろいろ考えて反発するよりかは、もういいや、体を使ってやってやるかというふうにやると、確かにそのほうがその社会ではうまく生きていくことができる。ロングスパンで見るとどうかかわらないですけども、その瞬間は少なくとも適応的で、結果として子供も多く生まれるということはあるのかもしれない。

藤本 契約という話と民主主義というのを結びつけると、先ほどの話ともかかわるんですけども、自立というか自分で思ったこと、それこそ社会的態度として、あるいは社会的態度という言葉を使わなくても、自分はこれが好きだとかこうしたいと思ったことをそのまま表出できるかどうか。民主主義というのは原理的には自分で思ったことを自分でやっていきましょう、自分で表に出していましょうということで、契約も同じなんですよ。もちろん相手との関係というのがありますけれども、契約の内容というのは最低限の条件はありますが自分で決めることができる。同じものでもおれはこれは 100 円がいい、でも 200 円でも買う人もいるでしょうし、5 万円出しても買う人もいるでしょう。それはよほどのことがなければ制限はないわけです。だからここは自分の好きなようにできるということ、自分の態度をそのまま外に出せるということです。

確かに契約というものに絡ませるのであれば、内藤さんの話ともかかわりますが、知能が高いと例えば民主主義との相関性というところの間に何かもう一段階かませるものが必要かなという気がちょっします。

敷島 そうですね。それは教育かもしれないし、信頼ということかもしれないし。

藤本 そうですね。信頼にかかわるあの話はおもしろそうでした。契約の前提にあるのは、それこそお互いに契約を守るという信頼関係がないと、世をすねて周りにはみんな敵意

を持っているというやつは、自動販売機以外で物を買えないかもしれないですし。だから一般的信頼というのは、すごく関係してくる話かと思っています。

内藤 古茂田先生。

古茂田 古茂田と申します。最後のほうしか聞けなかったんですけども、これは生物学者にも聞きたいんですが。

平石 僕は生物学者ではありません。(笑)

古茂田 でも非常にそちらサイドからの発言ですから。これはDNAを比喻で言っているのではなくて、本気で例えば民主主義を好むDNAがあると想定されているんですか。つまり、DNAというのは基本的には塩基ですから、何をやっているかというのはアミノ酸の合成しか命令していないわけでしょう。結局、それはアミノ酸が合成されて、例えば脳とか脳幹をつくっていくとか、あるいはドーパミンが出るとか、基本的にはそういうことですよね。そういう命令はできるけれども、民主主義を志向させるDNAというのは、私はカテゴリーミステークだと思うんです。

平石 それはないんです。

古茂田 おっしゃいましたか。

敷島 それはないです。遺伝の影響が統計学では出ますけれども、民主主義とかそういったものに直接かかわる遺伝子はどうもないだろうという仮説で検証しました。

古茂田 ただ、保守主義とかさっきリベラル遺伝子と保守主義遺伝子というような話が飛び交っていたので、どういうレベルで話していたのかなと。

平石 そこはちょっとミスアンダースタンディングなところで、実際のデータとして出ているのは、民主主義的な態度に関していえば、それを直接規定するような遺伝的なものは見えない。ただし一般的な知能に関しては、それは一つの遺伝子ではなくて数百数千の遺伝子座の影響として遺伝の影響が見られるというのはある。一般的知能から因果関係として民主主義的なものに矢印が伸びる。そうすると、一般的知能自体が遺伝の影響を受けているので、民主主義も遺伝の影響を受けることになるわけですけども、直接のパスではないから、もちろんそこに直接来る遺伝子というのはないでしょうというのが一つです。

ただ、愛国心については、そうとも単純に現時点では言えない。

古茂田 あるかもしれない。

平石 あるかもしれない。愛国心は一般知能が高い人においてのみ、遺伝の影響というものが非常にきいてくる。それは一体何なのかというのはちょっとわからないし、やはり何か本当は媒介しているその媒介項を見つけられていないだけなのか、本当に存在するのかということはまだ結論はできない。

古茂田 ただ、私は途中から参加しているのでよく理解できていなくて誤解かもしれないけれども、議論の断片の中で比喩的な省略語法でリベラル遺伝子と保守主義遺伝子がもし仮にあったとして、それが共存したほうが全体の適応度にいいのではないかといったら、そこで内藤さんがかみついたわけですよね。それはだれの適応度だという話になっていて、

割とそのベースで話が進んでいたから。

つまり本当に変異的に例えばエンドウマメの花のようにハードにそういう遺伝子があって……。報告者の説明の仕方では種全体の適応度が高まったのではないかという話をされたときに、そういうのは生物学的な議論でいうと成り立たない議論で、その本人が例えばリベラル遺伝子を持っていると、リベラル遺伝子の持ち主によれば適応されることがあるけれども、そうでない場合はいけないという割とハードな議論がなされていたので……

敷島 ただ、保守主義遺伝子があるんじゃないかと言っている人もいます。わからないんですね。ほかから派生したものなのかどうか……

古茂田 私は寄らば大樹の陰みたいな、すごく直感的なメンタリティーで、あるいはすごく冒険的にやってしまうとか、それはかなり単純にあるかなと思っています。ただ、それが保守主義とか愛国心と出すのは相当媒介があり過ぎる話で。だから、そういう意味でのバイオロジックなアティチュードというのは、子供を見ていると多分ちょっとあると思います。

平石 ただ、寄らば大樹の陰というのを持っている子は、例えば保守主義のほうに流れやすいということがあると、そののところに因果の矢印なのか相関なのかで何らかのものは出てくるでしょうということはある。

古茂田 民主主義は相当複雑だなと思って。民主主義を志向するというのはどういうことなのかというのは、非常に難しいなと私は思いました。

平石 ただ、民主主義と言っているのは、今回は敷島さんのつくったあの五つぐらいの単語に対して、アグリーかディスアグリーかというだけなので。

古茂田 その本体は聞いていないので申しわけない。

平石 そういう意味ではものすごく単純化した尺度で。

敷島 「言論の自由」「市民の政治参加」「共同募金」に賛成を民主主義とするという前提です。

古茂田 僕の感覚では、平石さんがさっき言ったように、省略語法で言ったとして、それがその人個人の適応度、つまりどれだけ子供を残せるかという話ほどに反映しないと思う。これはないという議論は、生物学の議論としてはそのとおりだと思うんですけども、社会的制度に媒介されて、例えば琉球語がどうなっていくかを見ると、別に琉球語をしゃべる遺伝子があるわけじゃないですよ。あるいはどうして低地ドイツ語がオランダ語と分裂したのかというのも、全然そうじゃなくて、みんながそれをしゃべっているという、その事実性がある文化をつくっていくわけでしょう。いろんな言語をやっていくということは、変異だとか選択だとか遺伝子の進化と非常に似たロジックで説明できると思います。そういう場合に、本当のハードな遺伝子のレベルというよりは、むしろその言葉をしゃべっていることのある社会的なステータスとか、それがないと公務員試験に入れないとか、例えばそういうのがあれば。

つまり、種全体というのは生物には成り立たないけれども、ある種の文化的概念とかア

イデンティティーグループの中では、それが一つの淘汰圧を主宰するような力を持って、そしてさっき言ったように普通の生物学ではあり得ないような進化とか淘汰というものが行われることはあり得るのではないかと思っています。まだうまく説明できないんですけども。

ですから生物学のさっきのあの議論は、いろいろ社会制度の話の中に直で出てくると、僕はもう少し考えたいなと思っています。それはちょっと舌足らずですけども。

敷島 例えば知能などは80%が遺伝というのですが、これも実はすごくややこしい話で、行動遺伝学の遺伝のというのは、もともと遺伝子の働きがある上に、例えば知能が高いと親が、あの子はこんな本も読みたいのかしら、あの本も読みたいのかしらと周りがその遺伝子に応じた環境というものを与えていく。自分自身も、じゃあもうちょっと図書館に行って勉強しようとか、そういった知能を高めるような環境を自分が選んでいくという誘発的なもの、受動的なもの、そして能動的に探していくといったように、もともと遺伝子の少しの差がまた環境自体を変えていく。遺伝環境相関といいますけど、そういったことの結果としてのこの遺伝率なんですね。ですから、遺伝率80%というのは、遺伝的な教育の結果であるという可能性も高いので、だんだん年をとるとともに遺伝率は本当に高くなっています。小さい子ほど低いというのは、結局、知能が高ければ高いほど、またそういった人たちの中に入っていく、いろいろな知的刺激を受けるということで、また知能が上がっていくという、そこがまたわからない。遺伝環境が何%とか分けていますけれども、実はこれは本当に複雑で遺伝と環境が相関していることが多いわけです。

ですので、いわゆる分子生物学の言うような遺伝というのと行動遺伝学で言う遺伝の影響というのは、ちょっと違うと思います。

平石 さっきの古茂田先生のコメントに関していうと、多分僕の考えていることもそんなに変わりはないことで、例えば社会においてみんなが琉球語を話すというのだったら、琉球語に行くという話です。同じように社会的態度についても、全体的に保守主義の社会になっている、その中ではそういうふうになったほうがいいということもあれば、むしろ逆に僕の考えとしては、そういうときには社会の流れにある意味迎合して、自分の態度を変える、そういう方向に育つ能力を人は持っているのであろうと。

ただし、そういうふうにするときに、自分のほかのいろいろな性格とかで、ある程度固定されているものもあるわけです。そうすると、どこまで保守主義のものに迎合することができるかというので、例えば非常に独立心が強いような人だと、迎合的に振る舞う方向に調整しようとしても、やはりうまくいかない。そうすると、自分がもともと持って生まれたものとの何らかの折り合いをつけてやるわけです。そこである程度の縛りというのがかかってくる。それが例えば一般知能を介してきいてくる遺伝的な影響だとか、性格を介して一般的知能に介する遺伝的な影響というものなのではないかということです。ですから、そういう両面に対して適当にバランスをつけていくことを人間は成長過程でやっているのではないかというイメージです。遺伝子という話についても、そんなようなイメージ

です。

ですから逆に言えば、社会的態度というような周囲の環境によってある程度柔軟に動かし方がいよいなものについては、特定の遺伝子は恐らくないのではないかと。そこは柔軟に動けるようになっていて、しかし一方で結構固定されてしまっているような、ある程度動かないような性格だとか、一般的な知的能力とかそういうものの中にはあるのではないかというストーリーを僕はいま考えています。

内藤 それはさっき加賀見先生がおっしゃった制度との絡みとも関連する話で、さっきのお話は社会的な態度というのが制度にどうやって影響するかというお話だったと思います。その反対に、こういう制度があるところで、個人のレベルで自分の持っている資質とか遺伝的な要素というのを踏まえて、権威主義的な社会があったときに、官僚になると言ってそこに飛び込んだほうが自分にとって適応度が上がる場合もあれば、あえて権威主義的な中でリベラルを訴えて権力と闘うみたいな位置で、例えばマスコミに行ったほうが、自分としては利益率が上がるという戦略もある。そういう意味での制度との絡みというのが、多分そのところに出てくるのではないかと思います。それは最後のところの内的環境という話につながっていくと思います。

藤本 では、議論も尽きないところですが、録音の関係等もございまして、ちょうど議論の流れが切れたところですので、ここで一たん閉めさせていただきたいと思います。論点がまだある方はお話を続けていただいても構いません。

本日は敷島さんに来ていただきまして、いろいろ興味深いお話をありがとうございました。どうもお疲れさまでした。(拍手)